

# 文体論の研究

豊田昌倫

2018年度のノーベル生理学・医学賞を受賞した本庶佑博士の名言——『ネイチャー』『サイエンス』に出ているものの9割は嘘で、10年たったら残って1割——には驚いた。生理学や医学の最先端では、当然のことと受け止められる常識なのだろうか。

本庶特別教授の持論を聞いて、まったく唐突で、畑違いながら思い浮かべたのは、Alison Gibbons & Sara Whiteley, *Contemporary Stylistics: Language, Cognition, Interpretation* (Edinburgh University Press, 2018) の一節であった。——‘initially cognitive poetics followed the norm of cognitive science in focusing on the individual mind and thus “the solitary reader”..., but this is a tendency which is now being resisted in contemporary stylistic studies of reading in social contexts.’ すなわち、cognitive poetics の提唱以降 10 数年が経過した今、‘the solitary reader’ の重視は現代の文体研究では抵抗を受けている、との指摘である。

Part I: Introducing contemporary stylistics; Part II: Literature as language; Part III: Literature as discourse; Part IV: Text as cognition; Part V: Reading as mental spaces; Part VI: Reading as experience; Part VII: Reading as data; Part VIII: Conclusion という構成が示すように、後半部で際立つキーワードは ‘cognition’ と ‘Reading’ であり、本書は stylistics を ‘a forward-thinking discipline’ と位置づける新進の著者による、斬新で先端的な現代文体論といえよう。たとえば、伝統的な文体論では、‘foregrounding’ が deviation や parallelism など言語分析の根幹となるのに対して、認知理論の ‘figure’ や ‘ground’ は、感覚認知に依存する読みの過程への理解を深めることになる。事実、近年の関心は product から process へ、text から reader へ移行しつつある。ただし、先を急ぐあまり、text から少しでも距離を置くことがあってはなるまい。Peter Stockwell は ‘About the Heart, Where It Hurt Exactly, and How Often’ with Joanna Gavins (*Language and Literature*, 21 (9), 2012) の中で ‘the centrality of textuality has not always been maintained in the rush for progress.’ と警鐘を鳴らしている。cognitive poetics の始祖による直言に、あらためて耳を傾けておきたい。

日本からの貢献として、まず Ken Nakagawa, *Wordsworth’s Vocabulary in The Prelude* (Keisuishu, 2018) における章の構成は次の通りである。1 Vocabulary that Constitutes *The Prelude*; 2 Words Combined with ‘Weight’ in *The Prelude*; 3 Verbs of Perception and Cognition in *The Prelude*; 4 ‘Mighty’ in *The Prelude*; 5 ‘Through’

in *The Prelude*; 6 Multi-Layered Structure of Expression in *The Prelude*. 著者は予備調査を踏まえた上で、とくに語彙のネットワークに焦点を当てて、詩の核心に迫ってゆく。ここでは3つのキーワード、‘weight’, ‘mighty’, ‘through’に関する箇所を紹介しよう。‘weight’は否定、肯定、中立という3つの価値に分類され、とりわけ、肯定的価値を持つ‘a weight of pleasure’が、‘vertically connected with the earth’という欲求を顕現する、との指摘は鋭い。‘mighty’がmindと共に起する事例が多い原因は、頭韻や母音の共通性などの‘sound structure’に求められ、さらに際立って頻度の高い‘through’については、先行する動詞と後続の名詞を精査の結果、この前置詞が‘interrelations between the poet’s inner world and the outer world Nature’を示唆し、*The Prelude*の中で‘a vital role’を果たすと結論づけられる。着眼点と明快な論述、精緻な図表が映える好論である。

Kazuho Murata, *The Structure of Defoe’s Phrasal Verbs: An Exploration into Defoe’s Language of Fiction* (Keisuisha, 2018) は、Defoeの小説における句動詞の統語的、意味的、文体的研究である。本書は1 The Syntactic Structure of Intransitive Phrasal Verbs; 2 The Syntactic Structure of Transitive Phrasal Verbs; 3 Semantic and Stylistic Analysis of Phrasal Verbs: Six Aspects の3章構成であり、第3章では句動詞の文体論的特徴が取り上げられている。たとえば、Six Aspectsのひとつである inversion の実例は、While I said thus, pretty boldly to the Fellow, comes a Woman out. であり、このパターンは通常の inversion [...comes out a Woman] に比べると、‘more immediate and lively impact’を与えるという。本書の特色は豊富な具体例の提示と分析であり、鮮烈でリアルな描写を生み出す句動詞は‘a “new” fictional prose’の創出と関連する、との著者の主張は説得力を持つ。

Masami Nakayama, *Grammatical Variation of Pronouns in Nineteenth-Century English Novels* (Hituzi Syobo, 2018) で扱われる‘grammatical variation’は、著者が序論で述べているように、文体研究にとっては不可欠で重要な概念である。まず本書の contents を示しておく。1 Introduction; 2 Dialectal Variation of Personal Pronouns; 3 Case Problems of Personal Pronouns; 4 The Nonstandard Usage of Demonstrative Pronouns; 5 The Rivalry between Relative Pronoun Variants; 6 Concord with Indefinite Pronouns; 7 Conclusion. 2-6章では、膨大な量の小説に関する量的および質的な分析が着実に行われている。1例をあげると、第2章では thou について *Pride and Prejudice* など20作品における使用頻度と話者の数を明示して、[Senior → Junior] [Female → Female] など話者のタイプと関連して分析が行われ、‘power’と‘emotion’がこの代名詞の‘two significant elements’である事実が明らかになる。とくに第3章の事例研究、第5章の関係代名詞の競合関係、第6章の不定代名詞の一致など、19世紀の小説で明らかにされる表現の特質は興味ぶかい。網羅的か

つ周到な調査が結実した本書は、さらなる発展性を秘めた力作である。

稲木昭子・沖田知子『アリスのことば学2——鏡の国のプリズム』（大阪大学出版会，2017）は、広く好評を博した『アリスのことば学——不思議の国のプリズム』（大阪大学出版会，2015）の姉妹編。Lewis Carrollの魅惑的な世界をプリズムを通してとらえる第2弾では、*Through the Looking-Glass, and What Alice Found There* (1871)のことばと論理が平易に説明されている。『鏡の国』における「アリスのことば」を解明するために、本書でも前書の数々の工夫が踏襲されている。すなわち、本文にはふんだんに原文と挿絵が収められ、加えて合計58のコラムが彩を添えている。コラムは「虫の目」「鳥の目」「魚の目」の3種類に区分されて、それぞれの視点からのエッセイは、ことば学というプリズムを通じた作品の輝きをさらに増す。Carrollによることばの仕掛けを丁寧に解明する本書は、語用論をはじめ文体論にも有益な示唆を提供する。

続いて国内の研究論文を列挙しておく。Akiko Sasaki, ‘The Use of Modal Auxiliaries in *Pride and Prejudice*’ (広島大学英文学会『英語英文学研究』第62巻), Kana Haraguchi, ‘Direct Speech Presentation in *Great Expectations*’, Shizuka Rachi, ‘Direct Speech Presentation in *Oliver Twist*’ (以上、広島大学大学院Phoenix, No. 77), 金城博之「*Under Western Eyes* (1911)の「語り」における自由間接話法(思考)とアイロニーについて」(岡山大学英文学会 *PERSICA*, 第45巻), 豊田昌倫「響きあう音、響きあう語——Virginia Woolf, *Mrs Dalloway* をめぐって」(『英米文学の扉』第2号), 田淵博文「Roald Dahlの‘Galloping Foxley’における言語表現とユーモアについて」(『現代英語談話会論集』第13号), 長柄裕美「カズオ・イシグロ作品にみる語りの間接性——『空白』と『入れ子構造』の効果」(『英語英文学研究』), 小倉悠輝「“An Ordinary Evening in New Haven”における『日常』の修辞学」(東北大学『試論』第52集), Natsumi Deguchi, ‘Resurrecting an Eye Metaphor: Adrienne Rich’s Cosmology’ (京都府立大学英文学会『コルヌコピア』第28号), 古庄 信「シェイクスピアの修辞法に関する一考察——『十二夜』における反復技法について」(『学習院女子大学紀要』第20号), 笠本晃代「ロシア人の登場人物間の言及と呼称について——*Vera: or, The Nihilists* を題材として」(*KWASSUI ENGLISH STUDIES*, No. 25), 織田 稔「詩言語にみるメタファーの危うさ——文学と語学のはざまで(II)」(関西大学英語学会 *Neo-ANGLICA* 第7号), 大久保朝憲 ‘Irony, banter, litotes and euphemism from an argumentative point of view’ (『關西大學文學論集』第68巻第1号), Shota Asahi, ‘An Attempt at Analyzing Verbal Ironies and Jokes’, *OUPEL*, vol. 18), 柿元麻理恵, 小野章「日本人学習者による文学作品の読みに文体論の知見が与える影響——O. Henry 作 *After Twenty Years* を題材に用いた質的・量的研究」(『英語英文学研究』), 小迫 勝「ヘミングウェイの短編“Big Two-Hearted River”: Part I 冒頭部——教育的文体論を活用した教材」(*PERSICA*).

## 文体論の研究

本来ならば、2020年版の本欄でお知らせすべきではあるが、ここで突然の悲報をお伝えしなければならない。昨年9月12日、Nottingham大学名誉教授 Ronald Carter 氏が入院先の病院で永眠された。常に活力にあふれ、颯爽として若々しい Carter 氏が逝去されたとは、今なお信じることができない。

文体論を英文学、英語学、さらに英語教育のインターフェイスとするならば、既存の境界を軽々と飛び越えて、新領域を切り開き、英国における文体論の建設を自ら実現したのが、ほかならぬ Carter 教授であった。文体論は応用言語学に位置づけられ、言語学の知見を文学研究および教育に応用すると考えられてきた。しかし、英語と比較文学を修めて、英語教育に関心を広げた Carter 氏には、とくに「応用」という意識はない。読み手の直観を言語特徴と関連づけ、さらにコンテキストに還元して解釈を行うアプローチは、文体研究の王道である。彼の論述は明晰で説得的、読む人を未知の世界、文体論の花園へと誘いこむ。もしも Carter 氏の膨大な著作の中から3冊を選べば、*Seeing Through Language: A Guide to Styles of English Writing* (with Walter Nash, Blackwell, 1990)、*Language as Discourse: Perspectives for Language Teaching* (with Michal McCarthy, Longman, 1994)、および *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide — Spoken and Written English, Grammar and Usage* (with Michael McCarthy, CUP, 2006) となる。*Seeing Through Language* は書き言葉のスタイルガイドであり、その白眉は John Galsworthy, *The Man of Property* と Robert Browning, 'Meeting at Night' の文体をめぐる鋭利な解説にある。いずれも著者のきらめく感性と分析力が十全に発揮されて余すところがない。*Language as Discourse* では口語と文語の多様な言語特徴が、社会・文化的コンテキストの中で浮き彫りにされてゆく。*Cambridge Grammar* は、Randolph Quirk (1985) および Douglas Biber et al. (1999) と並び立つ文法書の金字塔。とくに口語英語の記述に優れ、自然な話し言葉のスタイルを知る上でも必読の文献である。

上の3冊が象徴するように、彼は数多くの共編著を出版した。Walter Nash, Michael McCarthy, Paul Simpson, Michael N. Long, John McRae など優れた同僚に恵まれたこともあるが、Carter 教授は気配りに秀でて他者への信頼が厚く、お互いの長所を引き出す共同作業を楽しむ、稀有な才能の持ち主であった。その意味でも教育の真の実践者と言うにふさわしい。

Carter 教授は講演の名手でもあった。明快で歯切れのいい語り口、過不足のない適切な例の提示、さり気ないユーモアと笑顔。聞き手は思わず時間のたつのも忘れてしまう。日本で行われた講演やワークショップは、例外なく聴衆を魅了した。その Carter 氏が一日も早く全快され、ふたたび訪日する日が待ち望まれていた。が、しかし、まことに残念ながら、昨年9月、氏は帰らぬ人となった。痛恨の極みである。

(京都大学 / 関西外国語大学名誉教授)